第１８回兵庫県子ども・子育て会議

日時：平成３０年６月１日

場所：兵庫県公館　第一会議室

○委員

今年は、明治維新から１５０年という区切りの年を迎えている。次の２００年の区切りに、今の子どもや、これから生まれてくる子どもが住む兵庫県を、よりよいものにするという長期的な視点を持ちつつ、今できることもしっかりやっていくことが重要。

○委員

多額の予算をかけ、計画は全般的に順調に実行されているが、２０代の女性が流出し、待機児童は減らないという結果になった。これは、個々が有機的にかかわっていないためではないか。実施したものがどれぐらい効果を挙げ、大きな目標に近づいているかという分析、考察をしっかりしなければならない。

○委員

若い女性が兵庫県から出ていく理由は、働き方改革、子育て、高齢者介護。この３つが１本のラインに乗っていかないと改革できないし、地方が生き残っていくことも不可能。この３本柱がうまく連動していけるよう、現場の声も聞き、施策を考えることが必要。

○委員

日本の高校生は諸外国と比べ自己肯定感が低いというデータがある。これは、小さいころから人間関係に乏しく、体験が不足しているためで、人との出会いや、体験を積みながら成長すれば、夢や目標を持つことができ、自己肯定感が高まる。そのような地域づくりを進めれば住みよい地域になり、人口が流出しない。

また、子どもの体力が伸びていないが、基本的に外で遊んでいないため。若者になってから体を動かすのでは遅く、子どもの頃から体を動かす機会がなければいけない。誰もがいっぱい遊べる環境をつくり、子どもが群れてのびのびと遊べる兵庫にして欲しい。

○委員

多くの若年女性が移動するのは、就学場所と就職場所を選ぶとき。県内には文系女性を対象とした学校が多いが、県内求人は、理系の学生を求める製造系が多く、販売、営業、サービス業等の求人は大阪が豊富。このミスマッチが、状況を悪くしている一因であり、人の流れをよく見ながら就業場所の確保対策をする必要がある。

保育環境が整えば預けて働きたい人が増えるが、施設や人材確保がそれに追いつかず、待機児童が増えている。人材確保では、資格要件、配置基準にかかる規制改革を推進すべき。併せて、シニアを活用するなど、新たなところから人材、施設を確保していく必要がある。また、保育士も医師と同様だが、有資格者に過重な負担がかかっているので、その点も忘れてはいけない。

○委員

保育所の待機児童の次は、学童の待機児童が深刻になる。今も本当に満杯になっており、待機児童がふえている状況。保育所だけではなく、放課後の居場所づくりについても対策を考えること。

ＰＤＣＡを回しながら、どの施策がどうよかったか検証し、人や施策をつなげていくという意識を持って取り組むこと。

○委員

出会い支援事業は、登録した人をマッチングしていく体制だが、攻めの出会いサポートをしてもよい。幼稚園教諭、保育士、看護師さんなど、異性と出会う機会が少ない方を対

象に攻めの事業をすれば、婚姻数や出生数が増えるのではないか。

今の「ひょうご子ども・子育て未来プラン」は、～を支援する～を提供するといった表現が並び、暗い気持ちになる。楽しい気持ちや明るい気持ちになるような表現で記載してはどうか。

○委員

出会い事業におけるお見合い等は、もう少しうまく制度設計をして、楽しい気持ちになるような仕組みがあってもよい。

保育人材確保では、個人への一時金等による都市間の人材獲得競争が起こっている。この都市間競争を県がうまく調整しないと、特定の都市に人材が集まり、郡部での担い手がいなくなる。

保護者が、子どもを介さず、父親同士や母親同士で集まり、ちょっとした話ができるようになれば、地元に対しての愛着、地元に対する人間関係が生まれ、ふるさと意識の醸成につながる。そういう仕組みづくりも検討して欲しい。

○委員

待機児童対策は、頑張っている市町に人が集まり、また待機児童が増えてしまう。待機児童にはこのような側面があり、まだまだ需要の掘り起こしは進むので、ゼロにするのは難しい。ゼロを目指すというだけではなく、成果の出し方、情報の出し方に工夫が必要。

○委員

小・中・高・大学生は、子どもと関わる場面が少ないので、交流できる機会をつくっていけば、子どもの中で、結婚への希望が明るくなる。

○委員

２０代、３０代の若い女性が流出することについては、兵庫県の魅力がどこまで引っ張り戻せるかということ。ふるさと意識、ふるさとの魅力を子どもの時期にしっかり持てるよう、ふるさとを大事に思う心を育てていきたい。

○委員

人口減少時代にあって、これから右肩上がりの人口増や、出生数増が望めない中、新たな方法を模索していかねばならない。まちの魅力になり得るものとして学力が考えられる。定住をする親たちにとって、幼児期から高度な教育が受けられる学力が高い地域、高い学校、または高い町は、一つの魅力になる。

また、将来のふるさと回帰を狙って、子どもたちに多くの原体験をさせることが地域への誇りや愛着につながり、効果を上げる。

○委員

奨学金で大学を卒業した女子大生は、多額の返済に迫られ、結婚どころではなく、これが未婚化・晩婚化の一因となっている。このような女子大生が結婚に踏み切れるように、支援方策を考えてみてはどうか。

○委員

２０代の男性・女性が出ていくのは、就職場所が少ないため。第２新卒を照準に、カムバック施策をやっているが、やはり新卒のときに地元に残ってもらう施策を強化すべき。また、兵庫にとどまる、兵庫に戻るというような都市力が弱い。これは行政だけの問題ではなく、大学や企業にも責任があると思うが、その辺の魅力をどうやってアップしていくかの分析が必要。